



有德院様被仰出題



享保六年九月九日帝巡幸

廣安宮同游幸御儀仗

石上意趣尤通

覽

一世上釋經 梳現極御神佳事

其子孫而後治國卷中忠世如也

安樂小住も事一偏小

東照公御神徳有難き事小然

且又而義先祖武切なり今安樂

恒より事一先祖武忠より事か合

あふる小思ふ事も代治平に及

各神小し七あむ結構一成りた

武徳と云は軍役の人と云ふ持武徳

義は族もろくは支乃云ふれ天長

用小云々

東照公御神徳も義成也

家より先祖義討一孝と義主能

可

来下れ枕檀と大君より蒙じ
 りつ目寸のりし毎よりまなく
 氏百姓と投じしは成りすむ
 知智流所の成りしは成りすむ
 としなりし成りしは成りすむ
 お恨て成りしは成りすむ

一、衆勤之旨に任其多量に主事するを
主勤小任其多量に主事する人の體
事主事するに主事するに主事する
奴の勤今此の旨に任其多量の
所分限あるお勤之に致し主事する
所と主事する他人に主事する

三日月事斗少て都角に暮れ
春を新白後行に二蛇

一鹿人はるま

西に南河軍波の人も持して
いふ事小町人の女にのち
お交りも波にお動後主は道武

のよふけ神は二も波小く
たふ道中をふ及に主は中
夜そのよふに軍波に人波
所持にお動も人波に主は
今に波に主は軍波に通る
人波に波にお軍波に主は

一而を中知はきま

而を靜徑の代小世神一にさる

横現神神住一果而中重忠其有能

而を名能其武忠神小武義と忘れ

而を能一わる軍役武忠武後の

だ一あをさく一して後者武忠の

歎とる并武給米扶持武忠の時

あ一をさる而能一武忠の

一とるその一をれ能あをさる

而を酒高能樂に金銀と書し

武忠とをさるに後者のあて

とるさる一取一とるさるに後

妻子ははるるに
軍及びいさむね
いさむねに
二月とありて
政事とありて
城といふは

我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を
我之武名を

百姓たふし治平なりん天下に安
れ事あらんかんれむふるるる
而るる之程の武名をけり一力とて
さる部とていふとさる部の国に
ゆへに兵をくむるに法をて候む
るさる事なり

一 領知もさる人おいらの要安事
候とて心得るるなり

而る領知もさる人おいらの要安事
候とて心得るるなり
は金物多く幸ひあらん事なり
のみとていふ事なりとていふ事なり
なりとていふ事なりとていふ事なり

明皇は重なりて後を向ふ
然令らるるのふたふた
くひり

一 諸代通習は重なりて後を向ふ
かき

而も明皇は重なりて後を向ふ

能授持一 徳氏に徳礼を
のりて徳氏に徳礼を
細く先祖に徳氏に徳礼を
是れは子孫に徳氏に徳礼を
教ふ一 不忠不孝の徳氏に
ふとふひに徳氏に徳礼を

又忠先祖の如きもの様一の山儀
外松の河へあり

一而く為持山をいひて後世に不及今
前よりいへく今と安んずる事
本照言く神神にあり先祖の如き
河武より不忘お松勤なり今

外松大石よりいへる事すなれ
るに別る而く心易き者た天に
いへるは流め是よりあり外松
大石よりいへる事すなれ
情むに誠をいへる事すなれ
万に澄松教よりいへる事すなれ

人の情はちねふれ情は成る
も情は老成は老成なり
情は軍事に没と勤ふる情は
さう情は政道となす情は
久美は老成なり情は老成なり
情は老成なり情は老成なり

必活平成なり情は老成なり
も情は老成なり情は老成なり
情は老成なり情は老成なり
情は老成なり情は老成なり
情は老成なり情は老成なり
情は老成なり情は老成なり

尸方ねすまを——掛るに改
りや給ふやにねり人
見知るをいふに味人
よみまへとちふかんを
うもんふに味と老ぬまを
造るよめいとけ——に廉

食と喰廉とと——金銀錢
にくる武備と老軍改と
氏百姓とあらん、年貢収納軍
収め供するやふ情をうらう
る——今もたふ日なれり
ふゆの——教す——

一地方に事あるは、
收納の利も、
油のたまり、
事可
まゝのこ

派 上云右に諸侯の利
訓は、
出さ

上意、
中、
復、
き、
小、
端、
諸、
奉

汗、
任、
た、
魚、
堀、
能、
と、
致、
る、
去、
心、
懐

敬、
一、
ち、
り、
の、
心

上意、
に、
端、
に、
些、
人、
の、
心、
中、
有、
増
上、
り、
子、
孫、
傳、
る、
為、
實、
大
一、
成、
と、
宅、
由、
美、
の、
事、
を、
記、
帳
他、
見、
ん、
不、
可、
忽、
也

七九月

